

## 分布図から時代の特色と転換を理解する原始・古代史授業開発 —小单元「残されたモノから古代社会のしくみを探れ！」を手掛かりに—

### Developing an Instruction of the Protohistoric Age and Ancient History to Understand Characteristics and Conversion of the Period from Distribution Maps : Using 『Looking for Constructions of the Ancient Society from an Artifact』 as a Clue

八 田 友 和\* 山 内 敏 男\*\*  
HATTA Tomokazu YAMAUCHI Toshio

本研究の目的は、従来行われてきた原始・古代史学習の問題点を明らかにし、学習の改善に資する授業構成論と授業開発モデルの提案及びその効果を検証することにある。本研究で扱う原始・古代史の先行授業実践には、二つの問題点が指摘できる。第一に、授業実践において、遺物や遺構と歴史事象との関連付けや、資料が製作、利用された意味や意義までは問われていない現状である。第二に、遺物や遺構は、その資料単体で時代の特色や転換を説明できるものは少なく、複数の資料を組み合わせ、解釈を加える必要がある点である。

そこで、本研究では遺物や遺構が製作、利用された目的や意図とその変化が読み解ける複数の資料と遺物の移動や推移を読み取ることができる編年を加味した分布図を用いることで、遺物や遺構を比較検討し、製作、利用された意味や意義まで理解できる授業の開発を試みた。具体的には、小单元「残されたものから古代社会のしくみを探れ！」の開発と実践を行った。実践の結果、次の二点が明らかになった。第一に、複数の分布図を授業で取り上げ、並び替え・比較し、遺物や遺構が製作、利用された意味や意義を解釈させていくことで、時代の特色を理解する手がかりとなることが示されたことである。第二に、類似点と共通点を導出する過程を設定することで、時代の特色を理解する際の手掛かりとなることが明らかとなった点である。課題としては、時代の転換についての理解、各時代の展開に関わる概念理解までを見越した実践の改善が挙げられる。

キーワード：時代の特色、遺物・遺構、分布図、前方後円墳、三角縁神獣鏡

#### 1 問題の所在

学習指導要領の改訂により、高等学校における日本史学習は、「近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界と其中における日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を習得し、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察、構想する」(歴史総合)、「我が国の歴史の展開に関わる諸事象について、地理的条件や世界の歴史と関連付けながら総合的に捉えて理解するとともに、事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを考察し、よりよい社会の実現を視野に、歴史的経緯を踏まえて、現代の日本の課題を探究する」(日本史探究)科目として位置づけられた<sup>(1)</sup>。したがって授業では個別・詳細な知識を数多く記憶させるのではなく、それぞれの事象の意味や意義、特色およびその変化を生徒自身が資料から読み取り、考察、表現できることが目指されることになる。

例えば、原始社会、古代国家における社会や文化の特色を理解するに際して、視聴覚教材や実物教材の活用、博物館等の利用、遺物や遺構の見学などを取り入れることが生徒の意欲を高める上で効果的であると考えられ

る。しかし、実物を見せること、遺跡や遺物の見学は果たして教育的効果があるのだろうか。たとえ実物を見たとしても事物の特徴を抽出することに重点が置かれ、結果として生徒は事物の名称と特徴を覚えることに注力してしまうのではないだろうか。ここに実践上の課題がある。とりわけ、原始・古代の学習では、文字資料に制約があることから考古学的に価値があると考えられている資料(以下、遺物・遺構とする)から学ぶことが中心となっている。実際の学習では遺物・遺構を組み合わせ、解釈を加える方法について述べられていることは少なく、図版とともに発掘場所と用途が述べられていることがほとんどであることから<sup>(2)</sup>、授業者は遺物・遺構がなぜ、その時代に特徴的に現れたのか、所有することがどのような意味をもっていたのかについて問いかける必要となろう。しかし、授業の実際では、例えば縄文土器や鏡をはじめとする遺物は生徒の興味関心を惹くアイテムとして扱われ、遺物そのものの特性が把握されるにとどまるのではないだろうか。その一方で、他の遺物・遺構や歴史事象との関連付け、さらには遺物・遺構が製作、利用された意味や意義までは問われない現

\*クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス

令和元年7月10日受理

\*\*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻社会系教科マネジメントコース 准教授

状が想定される。ここで注目したいのは、遺物・遺構は、その資料単体で時代の特色や転換を説明できるものは少なく、複数の資料を組み合わせ、その異同から何らかの解釈を加えることによって、はじめて関連付けや意味づけがなされるという点である。

そこで本研究では、これまでに提案されてきた原始・古代学習の特質と課題を指摘した上で、遺物・遺構の比較、関連付けや意味付けができる学習を開発し、実践を試みることで上記の問題に答えたい。

## 2 原始・古代史学習の現状と課題

### (1) 原始・古代史学習における現状と課題

原始・古代史学習において遺物・遺構を積極的に取り入れた学習は、従来から数多く示され、多くは遺物・遺構から当時の生活や信仰を想起させることに重点が置かれている<sup>(3)</sup>。一方で、①威信財（希少価値がある器物で個人や集団の権威や地位を高めるために用いられた物）から製作・利用の目的を理解することを目指した学習、②古墳や寺院から権威の推移について理解することを目指した学習がある。①の学習として、有田和正による実践「二つの金印、どちらが本物か？」がある<sup>(4)</sup>。この実践で有田は実物とそっくりな寸法の金印を準備し、「国宝」は小さい物が多いことに気付かせるとともに、「金印は誰が何のために製作、利用したものかを想像させ、ロマンをかき立てるとともに、古代のなぞ解きを楽しませること」を授業のねらいとしている。金印という一つの遺物が当時の社会にどのような意味をもつものであったかを問い、漢と奴国との関係を類推させることが目指されている点で実践上の意義がある。しかし、実際の授業では金印の製作元が漢、光武帝であったこと、奴国が漢という後ろ盾を得ていることは取り上げられているものの、製作・利用の目的を問う問い「奴の国王は、何のために金印をもらったのでしょうか」については解決できないまま実践を終えている。こうした結果に終わることになった原因の一つとして、金印の模型の他に、児童が金印の製作、利用目的を解明する手がかかりとなる資料が用いられないまま授業が展開されていることが考えられる。遺物そのものを見せるだけでは、児童生徒が習得できるのは形状などの見た目や、用途が類推できるとどまることになる。すなわち、遺物・遺構を学習に用いる場合、遺物・遺構が製作、利用された目的や意図がわかる資料を併せて用いることが必要となるのではないだろうか。

②の学習として、小林朗による実践「なぜ馬子と太子は古墳に入ったのか」がある<sup>(5)</sup>。小林は古墳や寺院について、権威の側面から学ばせようと企図されており、蘇我馬子や聖徳太子が大きな古墳を造らなかった理由を類推させ、権威を象徴するものが古墳から寺院にシフトしたことを理解させようとしている。遺物・遺構と権威、権力を結びつけ、建築物、建造物が造られる意図を解明していくことが促され、実践を通して、古墳、寺院という複数の資料から時代の特色の変化が読み取

られることになる。しかし、なぜ権威を象徴するものが古墳から寺院にシフトしたのかについて、問われていない。したがって、生徒は突如として馬子、太子により寺院が造立され、古墳は棄却されたと単純化して考えてしまうのではないだろうか。改善の方略として、例えば古墳がどのような広がりを見せ、衰退していったのか、また、寺院はいつどのような広がりを見せていたのかなど、編年で分布をとらえていくことで、権威や権力の推移まで読み取っていくことが可能となるのではないだろうか。

そこで、本研究では遺物・遺構が製作、利用された目的や意図とその変化が読み解ける複数の資料と遺物・遺構の移動や推移を読み取ることができる分布図を編年で用いていくことで、遺物・遺構を比較検討し、製作、利用された意味や意義まで理解できる授業の開発を試みる。

### (2) 授業過程と学習方法

授業において分布図を取り上げる際、現在使用されている教科書の内容構成をふまえると、従来の原始・古代史学習においては、遺物・遺構の分布図を1枚提示することで、その広がりを読み解く学習が想定される。しかし、1枚の分布図から対象とする遺物・遺構の広がりを読み取るだけでは、時代の特色や転換を読み解くことはできない。なぜなら、一つの分布図だけでは、一つの遺物・遺構に対する空間的な広がりしか理解できず、他の遺物・遺構との関連についても、明らかにできないことが想定されるからである。したがって、複数の遺物・遺構の分布とともに広がりや推移を理解することが必要であろう。加えて、遺物・遺構の広がりを理解するには、「なぜ、広がったのか」を理解する必要がある。概念探究学習の学習過程を組み入れることができよう。例えば、岩田（2001）は概念探究学習について、「社会事象に関する多様な情報を獲得して、その中で、結果として存在している事象に対して『なぜ』という問いを発して、『原因』を探究していくのが、『わかる』学習過程の基本型である。」と述べている<sup>(6)</sup>。このことから、「なぜ」という疑問を設定することは、原因と結果の因果関係が理解できる学習過程だといえる。とりわけ本研究で扱う小単元は、日本史の最初の単元であり、新学習指導要領が述べている、深い学びの具現化を踏まえ、自ら問題を発見し、「なぜ」と問い、探究、解明することが、その後の学びに寄与すると考える。そこで、図1のような学習過程を踏まえた、次の6段階からなる教授方略および学習活動を構想した。

具体的には、社会事象の存在を「知る」段階として、①および②の教授方略および学習活動を設定した。また、なぜ疑問を②にもってくることで、原因を探究するきっかけ作りを行った。次に、「わかる」段階として、③から⑥までの教授方略および学習活動の設定を行った。教授方略の具体については、次の通りである。

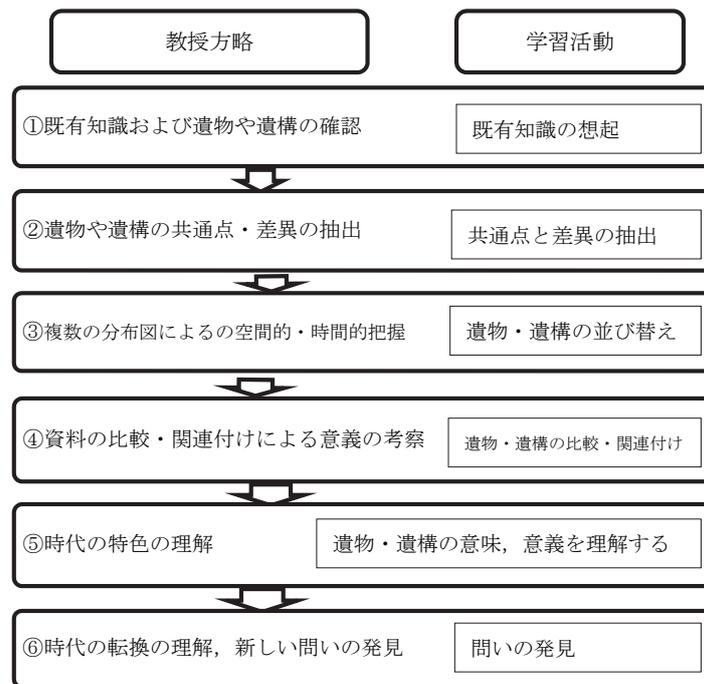


図1 遺物・遺構の変遷から社会構造を認識する学習過程

## ① 既有知識および遺物・遺構の確認

はじめに、導入において子どもたちがもっている既有知識を引き出す。導入において既有知識を確認することで、子どもたちがどの程度既有知識を保持しているのかを確認すると同時に、学習者の既有知識を想起させる。この段階では、先行学習経験において生徒たちは、遺物・遺構の名称やおおよその形状について知っている程度であることを想定する。土器を例にとれば、縄文土器や弥生土器などの名称やその形状を理解するにとどまっていると想定できる。よって、この段階では、遺物・遺構から学習する時代のイメージや理解していることが想起できることを目指す。

## ② 遺物・遺構の共通点・差異の導出

遺物・遺構のもつ特性が変化してきたことを理解し、資料のもつ製作、利用された意味や意義を引き出させたい。その際、異なる遺物・遺構の分布図を提示し、それぞれの資料の共通点と差異を抽出し、時代毎の特色を明らかにする学習過程である。この段階では、先に触れたように、縄文時代から古墳時代までの遺物・遺構を詳細に理解していない段階から、何のために、どのように利用されたのかを想定する。すなわち、遺物・遺構のもつ特徴とその変化を理解させる段階といえる。

## ③ 複数の分布図による空間的・時間的把握

複数の分布図を提示することにより遺物・遺構の広がりや空間的・時間的に理解させることができる。したがって、遺物・遺構が浸透・衰退していく推移の理解が可能となり、政治体制の拡大や変化が視覚的に明らかとなる。加えて異なる分布図を比較・検討させることで学習過程②で導出した遺物・遺構地域的偏りなどの空間的把握とともに、数的変化など時間的把握も行わせることで、推移を理解させる段階である。

## ④ 資料の比較・関連付けによる意義の考察

前の学習過程で扱った異なる遺物・遺構の分布図をもとに、推移の一般化を図り、使われ方から製作、利用された目的や意図を推理、時代の特色を理解させる段階である。具体的には、先に取り上げた遺物・遺構とは異なる遺物・遺構に着目、比較させることで、その推移と資料のもつ意味や意義の変遷を理解させることを目指す。

## ⑤ 時代の特色の理解

前の学習過程で行った資料の比較・関連付けによる意義の考察を踏まえ、この段階では、遺物・遺構が地域社会に与えた影響を考察する。例えば、中国から鏡が下賜されたことを踏まえ、中国の権威を背景に、ヤマト政権が拡大したことが理解される。そして、当時の中国とヤマト政権、地方社会との関連の理解につなげていくことになる。

## ⑥ 時代の転換の理解・新しい問いの発見

時代の転換を理解させ、新しい問いを発見させる段階である。例えば、6世紀頃から前方後円墳は次第に衰退し、代わりに寺院が建立されていったことに着目させると、「なぜ、当時のトレンド（傾向）が前方後円墳から寺院に変化したのだろう」といった発問ができる。こうした発問を設定することで時代の転換への理解を促し、次時との接続を試みる。

## 3 遺物・遺構の変遷から社会構造を認識する授業の開発

## (1) 内容構成原理

社会情勢や国際関係、技術革新によって遺物・遺構は大きく変化する。とりわけ原始・古代においては、文字資料は稀少であることから、社会のしくみ理解も遺物、遺構の残存状況に依存する傾向が強い。こうした傾

向をふまえると、遺物・遺構がもつ特徴とその変化を読み解くことが重要となってくる。したがって、遺物・遺構が製作、利用された目的や意図とその変化を読み解くことで、遺物・遺構の意味や意義が明らかとなり、当時の社会のしくみまで理解が及ぶと考えた。具体的には3世紀、古墳時代前期であれば三角縁神獸鏡をはじめとした銅鏡や腕輪型石製品から、呪術的・宗教的色彩が強い指導者の存在を読み取り、後期になると鉄製武器や武具から武人的性格をもつ指導者の存在を読み取ることができるであろう。本研究では、「黒曜石の分布図」「銅鐸の分布図」「三角縁神獸鏡の分布図」「前方後円墳の分布図」の四つの分布図を取り上げる。

第一に、黒曜石の分布図である。この分布図では、大分県姫島産の黒曜石の分布についてまとめている。この分布図からは、縄文時代前期の姫島を中心とした地域での交易が読み取れる。また、縄文時代後期の分布図では、交易範囲が西日本全域に拡大することが併せて読み取れ、交易の拡大とその影響について考察することができる。

第二に、銅鐸の分布図である。銅鐸とその同范関係の分布図から、銅鐸出現期は、近畿地方を中心に多くの銅鐸が使用されていたことが読み取れる。しかし、時代を経るにつれ、銅鐸が製作されなくなることが読み取れる。

第三に、三角縁神獸鏡の分布図である。この分布図では、椿井大塚山古墳（京都府）出土の三角縁神獸鏡と同范関係にある鏡の出土地点を線で結んでおり、ヤマト政権による銅鏡の配布について読み取ることができる<sup>(7)</sup>。

第四に、前方後円墳の分布図である。本研究では、3世紀から6世紀までの前方後円墳の分布図を100年ごとのスケールで4枚作成した。それにより、ヤマト政権の象徴的シンボルである前方後円墳が近畿地方から全国に拡大していく様子を読み取る。

以上の分布図を活用して、本研究では授業開発モデルとして、高等学校地理歴史科「残された物から古代社会のしくみを探れ！」を提案する。この単元では、縄文時代から飛鳥時代までを対象に、遺物・遺構の変遷を中核とした内容構成をとる。単元の中核となる遺物・遺構の変遷を資料の並び替えによって読み解く学習は、第2時および第4次で行う。

第1時の導入から第3時までは、縄文時代と弥生時代の遺物・遺構のもつ意味や意義が異なる理由を、黒曜石の分布図と銅鐸の分布図の読み取りと比較から明らかにする。中心発問は、「なぜ、縄文時代と弥生時代では、遺物・遺構の性質が違うのだろう。」「黒曜石の分布図から、何が読み取れるだろう」である。縄文時代は、個人・家族の生活、弥生時代は集団を意識した生活に変化するため、それに応じて遺物・遺構も個人から集団や領域を意識する資料に変わっていったことについても理解する構想とした。

続く第4時、第5時では、古墳時代から飛鳥時代にかけての政治のしくみを、前方後円墳と三角縁神獸鏡の分

布図から明らかにする。中心発問は、「なぜ、前方後円墳の広まりとともに、銅鏡も全国に広がっていくのだろう。」「なぜ、前方後円墳が担っていた権力のシンボルが、大陸伝来の寺院に取って代わったのだろう。」である。生徒は、前方後円墳の大きさと全国への拡大を読み取り、政治体制の拡大や変化を分布図の並び替え活動から理解する。それと同時に、椿井大塚山古墳から出土した三角縁神獸鏡と同范関係にある、三角縁神獸鏡の分布図を併せて提示することで、ヤマト政権から地域に三角縁神獸鏡が配布されたことを読み取る。そして、中国(魏など)の権威を背景としてヤマト政権が各地の豪族に対して優位に立ったことや、前方後円墳が伝播する様子(三角縁神獸鏡との類似性、相乗効果)に気付かせ、連合体として緩やかな支配を行っていたという3～6世紀にかけての社会のしくみの理解をしていく。しかし、6世紀以降になると、仏教文化を取り入れることが大陸文化の接収や王権への忠誠につながったという時代の転換まで理解することを目指す。

本研究では第4時を取り上げて学習の実際を示す。

## (2) 単元名

「残された物から古代社会のしくみを探れ！」

## (3) 単元の目標

### ① 思考・判断・表現

ア) 権威を象徴するものが、威信財から古墳、そして寺院に移り変わっていくことを資料から読みとることを通して、原始・古代史における政治構造の在り方を考察する。

### ② 知識・技能

イ) 遺物・遺構の広がりや威信財が果たした役割を類推することを通して、銅鏡が地域支配に与えた影響を理解する。

ウ) 縄文時代から弥生時代になる過程で、生活文化に関わる遺物・遺構から、権威を示す遺物・遺構に変化していく理由を考えることを通して、威信財が政治を進めていくうえで重要であったこと、社会に与えた影響を理解する。

エ) 弥生時代から古墳時代になる過程で、威信財をはじめとした権威を示す遺物・遺構が増えることや、墳墓記念物が築造される理由を考えることを通して、ヤマト政権の広がりや東アジアとの関係を理解する。

### ③ 主体的に学習に取り組む態度

オ) 原始・古代における、考古資料の分布と交易による遺物・遺構の推移や移動について主体的に調べる。

カ) 原始・古代史における、生活・文化に関わる資料だけでなく、共通点と差異、権威に関わる資料を比較しながら調べる。

(4) 単元構想 (5時間完了)

時	主な問い	目標	主な資料
1	なぜ、縄文時代と弥生時代では、遺物・遺構の性質が違うのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>遺物・遺構について主体的に調べ、課題を意欲的に追究する態度を養う。</li> <li>縄文時代から弥生時代にかけて遺物・遺構の共通点と差異を確認することで、次第に権威をともなった資料が増えてくることを理解する。</li> </ul>	遺物・遺構の写真
2	黒曜石の分布図から、何が読み取れるだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>黒曜石の分布図から、縄文時代の交易について確認することで、遺物の広がりについて理解する。</li> </ul>	黒曜石の分布図 黒曜石の矢じり (実物)
3	銅鐸の分布図から、何が読み取れるだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>銅鐸がもつ集団や領域を示す性質を考えることで、縄文時代から弥生時代にかけて集団や領域を意識するように変化したことを理解する。</li> <li>黒曜石と銅鐸の分布図を比較・関連付け、意義を考察する。</li> </ul>	黒曜石の分布図 黒曜石の矢じり (実物) 銅鐸の分布図 銅鐸の使用法想定図① 銅鐸の使用法想定図②
4	なぜ、前方後円墳の広まりとともに、銅鏡も全国に広がっていくのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>前方後円墳の分布図と銅鏡の都道府県別出土件数から、ヤマト政権が地方豪族に対して銅鏡を流布させることで、緩やかな支配を行っていたことを読み取る。</li> <li>前方後円墳の築造と威信財の配布による、ヤマト政権による緩やかな支配が行われていたことを理解し、当時のヤマト政権と地方豪族の関係を説明する。</li> </ul>	前方後円墳の分布図 銅鏡の県別出土件数 三角縁神獣鏡のレプリカ 卑弥呼による鏡の誇示 破鏡祭祀の様子
5	なぜ、前方後円墳が担っていた権力のシンボルが、大陸伝来の寺院に取って代わったのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>前方後円墳と寺院の分布図から、権威の象徴の具体が前方後円墳から寺院に変化したことを読み取る。</li> <li>仏教文化を取り入れることが大陸文化の接収や王権への忠誠につながったことを理解する。</li> <li>時代毎に古墳や寺院といった権威を象徴する遺構があらわれ、それと同時に権威を示した威信財が生まれてくることを理解する。</li> </ul>	前方後円墳の分布図 前方後円墳の盛衰を表した資料 飛鳥寺の復元図 初期における仏教信仰

(5) 展開

(1) 第4時 ①本時の目標 (単元目標イ), エ)

②授業展開

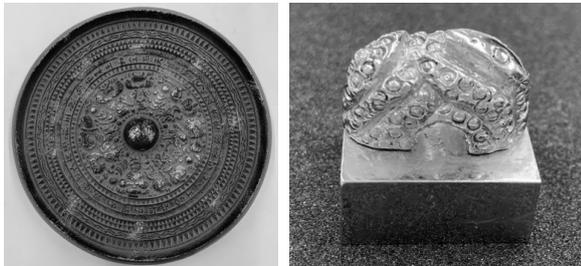
段階	学習活動	○発問, 指示 (説明) ・予想される反応	◇手だて ◎支援 【資料】												
遺物・遺構のおよび確認	1. 既有知識を確認する。	○縄文時代・弥生時代にはどのような遺物・遺構があっただろう。 <table border="1"> <tr> <td>縄文時代</td> <td>縄文土器, 土偶, 貝製の腕輪, 黒曜石, ヒスイ</td> </tr> <tr> <td>弥生時代</td> <td>弥生土器, 黒曜石, 金印, 青銅器, ヒスイ, 鉄器</td> </tr> </table>	縄文時代	縄文土器, 土偶, 貝製の腕輪, 黒曜石, ヒスイ	弥生時代	弥生土器, 黒曜石, 金印, 青銅器, ヒスイ, 鉄器	【資料1】 各時代の遺物を想起させることで、既有知識の確認を行う								
	縄文時代	縄文土器, 土偶, 貝製の腕輪, 黒曜石, ヒスイ													
弥生時代	弥生土器, 黒曜石, 金印, 青銅器, ヒスイ, 鉄器														
2. 遺物を確認する。	○古墳時代にはどのような遺物・遺構があったのだろう。 <ul style="list-style-type: none"> <li>鉄製の武器, 勾玉, 埴輪, 銅鏡, 稻荷山古墳の鉄剣 など。</li> </ul>	【資料2】													
共通点・差異の導出	3. 遺物を分類し、共通点と差異を導出する。	○縄文時代・弥生時代と古墳時代の遺物を分類して、表を完成させ、差異を指摘しよう。 <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>生活・文化</th> <th>権威</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>縄文時代</td> <td>縄文土器, 土偶</td> <td>貝製の腕輪</td> </tr> <tr> <td>弥生時代</td> <td>弥生土器, 黒曜石</td> <td>金印, 青銅器</td> </tr> <tr> <td>古墳時代</td> <td>埴輪, 勾玉</td> <td>鉄剣, 銅鏡, 勾玉, 青銅器</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> <li>縄文・弥生時代は生活・文化を扱った資料が多い。</li> <li>縄文時代から古墳時代になるにつれ、権威を示す資料が増えていく。</li> </ul>		生活・文化	権威	縄文時代	縄文土器, 土偶	貝製の腕輪	弥生時代	弥生土器, 黒曜石	金印, 青銅器	古墳時代	埴輪, 勾玉	鉄剣, 銅鏡, 勾玉, 青銅器	縄文時代から古墳時代にかけて、生活文化を扱った資料だけでなく、権威を扱った資料が増えていくことに気付かせることで、遺物・遺構の変遷について理解させる。 ノートに表にしてまとめる。
		生活・文化	権威												
縄文時代	縄文土器, 土偶	貝製の腕輪													
弥生時代	弥生土器, 黒曜石	金印, 青銅器													
古墳時代	埴輪, 勾玉	鉄剣, 銅鏡, 勾玉, 青銅器													
複数の分布図の空間的把握	4. 分布図を並び替え、古墳の拡大や資料の移動を時間的・空間的に把握する。	○前方後円墳の分布図を時系列に並べてみよう。どのようなことが読み取れただろう。 <ul style="list-style-type: none"> <li>ヤマトを中心に前方後円墳が段階的に広がっている。</li> <li>5世紀が前方後円墳の最盛期で、6世紀になると衰退していく。</li> </ul>	【資料3】【資料4】【資料5】 【資料6】 前方後円墳の分布図を複数提示することで、前方後円墳の広がりについて理解する。												
		○前時の三角縁神獣鏡の分布図と銅鏡の都道府県別出土件数を、前方後円墳の分布図と併せて考えてみよう。 <ul style="list-style-type: none"> <li>前方後円墳も三角縁神獣鏡も近畿地方に集中している。</li> </ul>	【資料7】												

資料の比較・関連付けによる意義の考察	5.前方後円墳と銅鏡の分布図から、権威の拡大を理解する。	なぜ、前方後円墳の広がりとともに銅鏡も全国に広がっていくのだろう。 ・古墳のなかに銅鏡を埋葬するため。 ・ヤマト政権が威信財として配布したため。 ・ヤマト政権に属しているシンボルとして、服従の印でもらった。	ヤマト政権の象徴が前方後円墳の築造であったことに気付かせることで、鏡との関係を考察させる。
時代の特色の理解と確認	6.古代の特色を理解する。  7.鏡の使用法を確認する。	○ヤマト政権はどんな目的で同范鏡を製作し各地に配布したのだろうか。 ・地方豪族に仲間のしるしをおくるため ・家来であるしるしを送るため  ○地方の豪族たちは、配布された鏡をどのように使ったのだろうか ・卑弥呼のように誇示した ・魔鏡として使用した。 ・鏡を割って、全員で分有した。	国内から銅鏡が500面以上出土していることを紹介し、中国からもたらされた銅鏡だけでなく、国内生産が行われていたことに気付かせる。 【資料8】 【資料9】 【資料10】
時代の転換、新しい問いの発見	8.時代の転換を導出する。  9.新たな問いを発見する。	○6世紀になると、前方後円墳や銅鏡の代わりに何がトレンドになるだろう。 ・お寺、寺院、仏像、仏具  ○なぜ、大和地方を中心に権力の象徴が前方後円墳から寺院に変化したのか、次回の授業で確認しよう。	【資料11】 寺院の権力を使って政治の実権を握った蘇我氏存在に気付かせることで、次時への接続を図る。

③資料

【資料1, 2】金印の複製・三角縁神獣鏡資料（レプリカ）、【資料3】3世紀の前方後円墳の分布図（石野博信（編）『全国古墳編年集成』1995年、雄山閣出版、pp.182-183をもとに国土地理院地図を用いて筆者作成）、【資料4】4世紀の前方後円墳の分布図（石野博信（編）『全国古墳編年集成』1995年、雄山閣出版、pp.182-183をもとに国土地理院地図を用いて筆者作成）、【資料5】5世紀の前方後円墳の分布図（石

野博信（編）『全国古墳編年集成』1995年、雄山閣出版、pp.182-183をもとに国土地理院地図を用いて筆者作成）、【資料6】6世紀の前方後円墳の分布図（石野博信（編）『全国古墳編年集成』1995年、雄山閣出版、pp.182-183をもとに国土地理院地図を用いて筆者作成）、【資料7】銅鏡の県別出土件数（京都大学文学部考古学研究室（編）『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部1983年、p.72をもとに筆者作成）、【資料8】卑弥呼が鏡を誇示する様子（大阪府立弥生文化博物館常設展示室にて筆者撮影）、【資料9】魔鏡として使用している様子、【資料10】破碎された鏡（大阪府立弥生文化博物館編『卑弥呼・女王創出の現像学』2015年、p.72をもとに筆者作成）、【資料11】畿内における大型古墳の編年（『オオヤマト古墳群と古代王権』2004年、pp.50-51より筆者作成）



【資料1, 2】金印・三角縁神獣鏡のレプリカ資料



【資料3】3世紀の前方後円墳分布図



【資料4】4世紀の前方後円墳分布図



## 4 結果と考察

### (1) 事前アンケート

ここでは、遺物・遺構の推移を空間的・時間的に把握し、製作、利用された意味や意義を探究する実践における、学習者の認識変容の実際を明らかにすることで、本研究の有効性を検証する。

まず、事前アンケートの結果について簡単に整理を行う。本実践を行う前日に、受講者を対象に、「前方後円墳について知っていることを書きなさい」「銅鏡について、どこからもたらされ、どのように使用されたのか、知っていることを答えなさい」の2つの質問を行った。それを受けて、生徒が想起した既有知識は表1および表2の通りである。

表1 学習者がもつ前方後円墳の既有知識

学習者のもつ既有知識	人数
大仙陵古墳に関する記述	8
権力者の墓	2
大きさ・形に関する記述	4
被葬者・副葬品に関する記述	4
その他（前方後円墳の絵を描いたもの）	3

(分析対象とした学習者の数は9名で、  
複数回答を可としている。)

表2 学習者がもつ銅鏡の既有知識

学習者の持つ既有知識	人数
三角縁神獣鏡	1
中国からもたらされた	2
朝鮮半島からもたらされた	3
祭事で使用された	3
呪術	2
権力の象徴	1
異国との繋がりを示すもの	1

(分析対象とした学習者の数は9名で、  
複数回答を可としている。)

表1から、学習者がもつ前方後円墳に関する既有知識としては、大仙陵古墳に関する記述が最も多く8名、次いで、「大きさ・形に関する記述」「被葬者・副葬品に関する記述」がそれぞれ4名であったことがわかる。ここから、学習者は、前方後円墳に関する断片的な知識を保有していることがわかった。しかし、古墳の形状やその大きさ、代表的な古墳名を記憶するにとどまる生徒が多く、前方後円墳がヤマト政権の象徴的シンボルとして機能したことや、東アジアとの関わりに言及する回答は見られなかった。

加えて、学習者がもつ銅鏡に関する既有知識は、「朝鮮半島からもたらされた」「祭事で使用された」が最も多くそれぞれ2名であった。次いで、「中国からもたらされた」「呪術」との回答がそれぞれ2名であった(表2)。また、「ヤマト政権はどのように支配をしていたのか」に関しては、「呪術」や「臣連の姓」との回答があった。しかし、前方後円墳の大きさと規模の拡大や三角縁神獣鏡の配布に着目した回答は見られず、授業者の指示「ヤマト政権の広がり」と東アジアの関係について知っていることを書きなさい」では、「金印」や「遣隋使の派遣」など、錯誤している生徒が多いことも示唆された。

### (2) 事後評価

授業実践(第4時)では、前方後円墳の編年分布図を時系列に並び替える活動を取り入れることで、ヤマト政権の拡大を理解するとともに、比較資料として、三角縁神獣鏡の県別出土件数などを提示することで、東アジアとヤマト政権、地方の関係を明らかにすることを目指した。なお、生徒の回答を評価するに際して、はじめに第一筆者による評価を行った後、第二筆者と協議を行い妥当性を確認した。以下、学習者にどのような変容があったのかを授業中に書かせた説明文から評価、検討する。

表3 設問と評価基準および集計結果

No.	ねらい	設問内容	評価基準	集計結果
1	前方後円墳の分布図と銅鏡の都道府県別出土件数から、ヤマト政権が地方豪族に対して流布させることで、緩やかな支配を行っていたことを理解することができる。	なぜ、前方後円墳の広まりとともに、銅鏡も全国に広がっていくのだろう。(ヤマト政権はどのように地方支配を行っていたのだろう)	A. ヤマト政権の勢力拡大を前方後円墳の拡大と銅鏡の配付の両方を関連付けて、説明することができる。 B. 前方後円墳か銅鏡のどちらかを取り上げ、ヤマト政権の支配拡大を説明することができる。 C. 説明できない・無答である。	A. 0人 B. 7人 C. 2人
2	中国の権威を背景に、銅鏡の同范鏡を作成し、より多くの地方豪族に配布することによって、地方豪族を支配し、政権の安定化を図ったことを理解することができる。	ヤマト政権の支配について、銅鏡のもつ意味や意義と東アジアとの関係を踏まえつつ、説明しなさい。	A. ヤマト政権が、中国から下賜された鏡をもとに精巧なレプリカを作成し、地方に配布することで、中国の権威を利用して緩やかな支配を行っていたことを説明できる。 B. 中国から下賜された銅鏡を用いた支配が行われていたことを説明できる。(同范鏡の説明はできない) C. 説明できない・無答である	A. 2人 B. 6人 C. 1人

表4 生徒の回答とその評価

No.	生徒の回答（カッコ内は評価，下線は筆者）
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国から倭を通じて地方にもたらされた。(C)</li> <li>・副葬品でヤマト政権のシンボルとして使われた。(B)</li> <li>・中国から倭に伝わり，ヤマト政権が権力を示すために地方に配った。(B)</li> <li>・中国からもたらされ，呪術的な使い方をして，ヤマト政権のシンボルとなった。(B)</li> <li>・中国からもたらされ，ヤマト政権の権力としての象徴として使用された。(B)</li> <li>・中国や朝鮮から。割ったり反射させたり。(C)</li> <li>・中国，朝鮮半島。呪術，権力。(B)</li> <li>・中国からヤマト政権に渡り，政権のシンボルになった。(B)</li> <li>・副葬品として，ヤマト政権の象徴的シンボル。(B)</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国から倭に入り，そこから地方に銅鏡がわたった。前方後円墳は貧富の差や権力を示す必要性があり，国をおさめるのに必要なものとなった。(B)</li> <li>・地方に前方後円墳を作り，中国から伝わった銅鏡を配ってヤマト政権の象徴にし，権力を示して従わせた。(B)</li> <li>・中国からもたらされた銅鏡がヤマト政権のシンボルとなり，<u>前方後円墳と同時にレプリカと同範鏡を配った。</u>(B)</li> <li>・中国からもたらされた銅鏡を用いて，<u>自分の背後には大国がいるという強大な支配力とともに，権力の象徴である前方後円墳によって支配を強めた。</u>(A)</li> <li>・中国バックを強調する銅鏡に権力の大きさを表す前方後円墳を見せびらかした。(B)</li> <li>・中国からのかがみをつかって権力をあげ，<u>前方後円墳を日本中にひろめた。その副葬品が銅鏡。</u>(B)</li> <li>・中国から最新技術を得て，前方後円墳や銅鏡を自分の味方に渡した。(B)</li> <li>・中国への朝貢により，報しゅうとして得た銅鏡や渡来人などの技術を用いて造った同範鏡を各人の武力・支配の象徴と，ヤマトとの繋がりをアピールさせた。(A)</li> <li>・(記述なし)(C)</li> </ul>

事後評価の結果を表3・4に示した。はじめに，事前アンケートに見られたように，ヤマト政権の成立，展開時において金印や遣隋使の派遣といった錯誤は見られなくなっていた。次に，各設問についての分析，検討を行う。設問 No. 1 は【資料2～5】前方後円墳の分布図と【資料6】三角縁神獣鏡の都道府県別の出土件数の読み取り，比較，関連付けに関わる設問である。評価の結果，7名がB評価に該当するとした。生徒たちは鏡がヤマト政権の権力の象徴，シンボルとして各豪族に配付されていく過程について理解できていたことが読み取れる。一方で，前方後円墳と銅鏡とを関連付けた記述は見られなかったことから，前方後円墳の広がりや銅鏡の配付についての関係理解は不十分であったと読み取れる。しかし，この評価に一旦留保を付したい。というのも，設問 No. 2 では前方後円墳について記述している生徒が7名，うち3名（下線部）が古墳と銅鏡の同時性ないしは相乗効果について言及している。このことから，設問 No.1 では生徒たちには前方後円墳と銅鏡との関係を併記することが理解できておらず，銅鏡の効力のみと言及しようとしたことがうかがえる。設問 No.2 の記述をふまえるならば，前方後円墳と銅鏡との関連付けが一定程度成功していたといえよう。

設問2は，同範鏡の製作，配付を例にヤマト政権はより大きな中国の権力（魏など）を背景として地方豪族に対して優位性を保ちつつ，権威の誇示，政権の安定を図ろうとしていたことが理解できていたかを問うている。回答からは中国の権威を背景として政権を保とうとし

ていたことは理解できていることが読み取られ，先述したように，前方後円墳と銅鏡との関連付けを図った記述ができていたことが示唆される。ただし，ねらいとした同範鏡の製作目的まで言及できている生徒は限られていることから，より多くの地方豪族とのつながり，支配を保とうとしていたことまでの理解は十分とはいえない。その原因として考えられるのは，授業において同範鏡が製作された意味や配付される意義については，授業者による言及がなされていたものの，生徒たちで同範鏡の製作，利用の意味や意義までは解釈，吟味できていなかったことが考えられる。遺物，遺構を製作，所有する目的や意図について問う場面を設定する必要があった。また，威信財は大陸からもたらされたものが多いことが古代社会の特色の一つであることから，第2時以降において，東アジアと我が国との関係性について言及する発問や学習活動を組み込むことが有効であると考えられる。

## 5 研究の成果と課題

これまで，原始・古代史における遺物・遺構の比較，関連付けや意味付けができる学習について，開発した単元の具体を示しながら明らかにしてきた。これまでの遺物・遺構を取り上げた学習では，利用された年代や特徴の解明が目指されており，製作，利用された目的や意図を解明する学習は必ずしも十分ではなかった。それに対し，本研究では，遺物・遺構が製作，利用された目的や意図がわかる資料を取り上げ，何のために造られ，利

用されたのかを解釈する活動、分布図を編年で提示し、推移を読み取る学習を組み入れた。それによって、遺物・遺構を取り上げた学習において遺物・遺構を比較検討し、遺物・遺構が製作、利用された意味や意義まで理解することが可能であることが示された。例えば、共通点・差異の導出過程において生徒たちは縄文時代と弥生時代、古墳時代それぞれの遺物から生活文化に関する比較を行い、珍しさ（希少性）や神秘性への気付きから権威という視点の獲得に成功している。

また、学習は遺物・遺構の特徴を把握する段階、分布図をもとに遺構や遺物を空間的・時間的に把握する段階、他の遺構や遺物の広がりとの比較、検討をする段階を経て時代の特色を把握し、時代の転換の理解を目指し、構想、実践がなされていた。この授業構成をとることで、生徒たちそれぞれが遺物・遺構同士を比較、関連付けを行い、銅鏡を事例に、威信財の多寡や広がりを通じたヤマト政権と地方豪族、東アジアとの関係がわかること、すなわち権威を重視した政治の特色理解が促進されたと考えられる。加えて、遺物・遺構の類似点と共通点を導出することで、時代の特色を理解することの手掛かりとなることも明らかになった。

今後の課題は、分布図を読み取り、解釈を加える際に、経済や政治の構造などの全体を把握させる必要があることである。遺物・遺構が変化した原因と他の事象との関連づけを授業において精緻化していくことが必要となる。

## 謝辞

本研究を行うにあたりまして、鈴木康二氏（公益財団法人・滋賀県文化財保護協会）および三原大史氏（広島県立大学院生）に協力をいただきました。また、調査・研究にあたっては、「兵庫教育大学大学院同窓会会員と大学教員との共同研究助成金」を活用させていただきました。記して御礼申し上げます。

## 註

- (1) 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』  
([www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afiedfile/2014/10/01/128200\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2014/10/01/128200_3.pdf))  
2019年7月7日最終確認
- (2) 例えば、現在発行されている中学校歴史的分野の教科書の図版において鏡が示されているのは4社であり、そのすべてが発掘場所と儀式に使われ、古墳の副葬品であったという用途を示すにとどまり、鏡を保持することの意味まで言及していないことから明らかであろう。
- (3) 八田友和「物質資料の変遷から社会構造を認識する中学校社会科授業開発一単元『残されたものから古代社会のしくみを探れ』一」兵庫教育大学提出修士論文、2017年、pp.27-38
- (4) 有田和正『有田和正著作集第10巻 教材発掘から

- 授業づくりへ・高学年』明治図書、1989年、pp.91-93
- (5) 小林朗「なぜ馬子と太子は古墳に入ったのか」歴史教育者協議会編『歴史地理教育』No.587、1998年 pp.48-51
- (6) 岩田一彦『社会科固有の授業理論 30 の ; 提言 - 総合的学習との関係を明確にする視点 -』明治図書、2001年、p.91
- (7) 京都大学文学部考古学研究室（編）『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部、1989年、p.56